

平成30年度学校図書館専門部会県外視察研修会 報告書

(記載責任者 磐田東中学校・高等学校 司書教諭小林みどり)

1. 研修目的

県外の先進的な公共図書館・学校図書館の視察、並びに参加職員間の情報交換や交流を通して自校図書館の充実のための具体的方策について知見を得る。

2. 期 日 平成30年11月26日(月)・27日(火) 1泊2日

3. 参加者 11名

4. 視察・訪問校

- ①11月26日 株式会社コクヨ 品川ライブオフィス
〒108-8459 東京都港区南1-2-70 品川シーズテラス
電話 03-5275-6057
FAX 03-5275-6230
- ②11月27日 かえつ有明中学校・高等学校
〒153-8711 東京都江東区東雲2-16-1
電話 03-5564-2161
FAX 03-5564-2162
校長 小畑 秀文先生
司書 眞田 明子先生

5. 研修行程

- ①11月26日(月) 〈新幹線こだま636号〉浜松発9:21⇒掛川発9:32⇒静岡発9:52
⇒新富士発10:09⇒三島発10:18⇒品川着11:16 着後昼食
⇒コクヨ株式会社品川ライブオフィス13:00～16:00
- ②11月27日(火) かえつ有明中学校・高等学校
10:00～10:25 学校紹介・授業見学・施設見学のポイント
10:45～12:35 授業見学(3・4時間目)
12:35～13:20 昼食
13:20～14:10 「図書館の活動について」司書眞田先生より
14:30～15:00 質疑応答・諸連絡・閉会
閉会后、新幹線こだま各駅にて帰着

6. 研修内容

【①：コクヨ株式会社品川ライブオフィス研修】

創業1905年、企業理念は単なる文房具メーカーではなく文具を通して「世の中の役に立つ」こと。ライブオフィスとは世の中の絶え間ない変化とともに常に前進し続けるために、現在話題となっている働き方改革、オフィス改革を実現するものとしての(クローズを含む)オープンオフィスを意味する。

オープンオフィス見学 1フロア内の各スペース概要)

CIRCLE(サークル)⇒事業部門の情報発信ハブ。部門ミーティングや発表会などに活用。

WORK(ワーク)⇒コミュニケーションや組織に縛られない流動的な働き方に挑戦。ペーパーレス、PCレススペース。

POOL(プール)⇒拠点全体のコミュニケーションハブエリア。イベント、プレゼンなど多目的に活用。

CAMP(キャンプ)⇒指向性スピーカーなど先端設備を実験導入するセミオープンな会議空間。

DRIP&DROP(ドリップ & ドロップ)⇒センターに人が集う工夫スペース。コンシェルジュが常駐、社員の要望を受託。

社員は定位置の机を持たない。オフィスの一カ所に集められたブリーフケースの集合棚からそのケースを取り出し、その日に必要な場所で仕事を進める。部署の異なる社員が交流し、新たなチームを立ち上げたりすることもある。定時出勤ではなく月ごとの出勤時間を自己管理する。必要ならば申請して自宅での仕事も可能。社員の交流を意識的に増やす、また交流し易いカフェを中央に設けたりもしている。

〈クローズスペース見学〉

集中するための空間で、個人の発想に刺激を与える書籍をプロの選書でレイアウトし、個室での作業も可能なスペースを設けている。このスペースは人間の体内に入っていくような発想から、深部は睡眠による活性を期待できる空間もあり、ワーカーに人気があるということであった。実際眠っているのであろう社員の姿も。働き方と学び方を外部の専門家やパートナーと共に研究し、より効果的に生産性を上げるための環境づくりの提案を五感からアプローチするという象徴的なスペースとも捉えることができた。

【②：かえつ有明中学校・高等学校研修】

1. 校訓『怒るな働け』
2. 教育理念 生徒一人ひとりが持つ個性と才能を生かして、より良い世界を創り出すために主体的に行動できる人間へと成長できる基盤の育成
3. 沿革 1903年 創立者 嘉悦孝先生 日本初の女子商業高校として創立
1907年 私立日本女子商業学校と改称
1952年 嘉悦女子中学校・高等学校と改称
1998年 富士見校舎全面改装
2006年 嘉悦女子中学校・高等学校から男女共学のかえつ有明中学校・高等学校に改称
有明キャンパスに新築移転、落成

視察校は百年を超える歴史の中で、私学の競争を生き抜くための変遷を重ねて現在に至る進学校である。中学校で展開される思考力、表現力を育成する教科「サイエンス」は「考えること」について基礎的なスキルを中学校3年間を通して身につけることができるよう、独自のカリキュラムを組んでいる。それを支え学ぶ場として、教科と教科、知識と生徒を繋ぐハブ的な役割を「ドルフィン」という愛称の図書館が担っている。単なる情報センターとしてではなく、アクティブラーニングをはじめとする教育活動を支え運営されている図書館ということで、当日は非常にオープンに図書館の中の四カ所で毎時展開される中高の多くの授業を見学させていただくことができた。

《視察校の特徴》

1100名の生徒数の中で高校からの募集はひとクラス。「サイエンス」という探求の授業を中1で行い継続的な指導を行う。中学は男子クラス、女子クラスの併学。全校の2割が帰国子女であり、特長としており受け入れは積極的である。豊洲に移転し生き残りを賭け多くのことを始めたが、その中で取捨選択を繰り返し、継続していないものも多くある。スポーツクラスなどはその一つと言える。人工芝にし、サッカーで全国を目指すという目標もあった。「サイエンス」という探求を特長とする科は現在卒業生を一回出している。

《ドルフィン(図書館)という場所》

現在は徐々に学習スペースを広げたため、四カ所で授業ができるようになったが、教室とは異なる環境が人気で、授業時間の場所取りが行われるほど。2014年から徐々に授業用の机と椅子を移動可能でグループ学習のしやすいアクティブなものに変更した。雰囲気は硬くなく自由に発言できる環境を整えた。もともと図書館自体が広がったためもあるが、書架と書架の塊を境界として、授業スペースがある。

《アクティブラーニング・ラーニングの印象に残る授業》

高校1年の難関大を目指すクラスの物理の授業では、定期試験範囲の問題を、主体的に分かれた3～4名のグループがそれぞれホワイトボードに説明し合い、理解しようと努力していた。グループを超えて聞き合い相談し、それでも理解できないときに担当教諭に質問する、というスタイルで一人一人が確実に授業の最初から最後まで参加しているため、全員が生き活きと活動していた。毎日の宿題も自分たちで決める。グループは担当が時期を見計らい、自分が学べるグループを再構成するという。座学の一斉授業ではないこのスタイルに対して、質問に答えてくれた生徒はこの授業が好きで意味を感じ、全部の授業がこの形がいいと答えた。現在このようなスタイルの授業はこの物理のみで、他の授業は従来通りの座学ということだった。

《司書の眞田先生のお話から》

「サイエンス」の授業には「思考を深める探求学習」(桑田てるみ著)からの可視化カード等を使用、毎年の「サイエンス」の授業で資料の改善・充実が繰り返され、資料として完成している。また、「思考力の鍛え方」(桑田てるみ著)は「サイエンス」発足時からドルフィンの在り方の基盤となっている書でもある。

現在「サイエンス・チーム」は16名の先生方が所属している。分掌を超え、「サイエンス」に理解のある教員、また勉強の必要な若手の教員で構成されている。最初からこのような人数ではなく、当初は「思考力を鍛える」という信念のある教員が核となり、徐々に「サイエンス」理解者を増やしていった経緯がある。チームワークで信念を貫こうと、ハブとしての図書館づくりを開拓した、情熱ある実践者の声として伺うことができた貴重な機会であった。

